

『感染症大全——病理医だけが知っているウイルス・細菌・寄生虫のはなし』

●著者／堤 寛

●定価 本体 1,636 円＋税 ●四六判 392 ページ ●飛鳥新社刊

●発行年月：2020 年 4 月 ●ISBN 978-4864107570



著者は、長年大学に籍を置き、多数の病理診断を下し、感染症を得意とする病理医である。本の題名と元教授という肩書きから教科書的な堅い本をイメージするが、決してそんな本ではない。わかりやすい語り口で、読みやすく書かれ、医学の知識のある人ばかりでなく、ない人も楽しめる内容になっている。

第1章では、世界を一変させた新型コロナの話にはじまり、消毒の父ゼンメルワイスの逸話、ピロリ菌の発見、ノーベル賞を受賞した大村 智先生の話へと発展する。

第2章は、Q & A 形式で病原体と感染症について述べ、病原体の大きさからワクチンまで基礎知識をわかりやすく解説している。医学を学んだ人も、基礎知識をもう一度勉強し、再確認できる。

第3章は、インフルエンザからはじまる日常に潜むウイルス・細菌・カビの話である。病原体ごとに症例を提示し、感染経路、原因、重症例の病理所見などに言及している。読者の感染予防にも役立つ知識である。とくに印象に残ったのは、日本紅斑熱で、この病気を発見した開業医と著者が協力して早期診断法の開発につながったことである。著者の得意とする免疫染色法は、多くの病気の診断に役立っている。この方法を使って、診断を下していく著者は、未解決の事件を解決する名探偵のようである。

第4章は、寄生虫の話である。馴染みのある寄生虫からグローバル化により海外で感染した稀な症例も提示している。害のないものから全身を移動する寄生虫まであり、恐怖を感じるものもある。

第5章は性感染症の話である。「病理標本からその人の性生活が明るみに」と著者がいうように、細胞診断・病理診断は、患者のプライバシーまで明らかにしてしまう。症例提示から不用意な性行為や風俗は、リスクを伴うことがよくわかる。

本書の特徴は、症例のなかで語られる自分の経験や、多くのコラム内で述べられている歴史的な話やエピソードの面白さであろう。興味深い蘊蓄が満載され読者を飽きさせず、一気に読ませる。その内容から著者の豊かな経験と知識に驚かされる。もうひとつは、第3, 4, 5章の各病原体につけられた美しい病理写真と、大きさ、感染経路、症状、予防法、治療などのデータであろう。読んだ後、簡単な感染症の辞典として、臨床医の診察室にも置いておきたい本である。

(小林研介／内科医・小林医院院長)